

唐詩に現れた「帯」の解釈について

— 訓読批判 (其の一) —

松 尾 善 弘

一 「春星帶草堂」考

「漢語は言うまでもなく漢字で示すけれども、日本には昔から漢字の訓読という習慣があつて、日本語の語を漢字で表わすことがある。日をと読むがごときがそれである。しかし漢字を表語的に使うということには変りがない。」

漢字の表語性を日本型特殊な形式で利用したのが訓読であるといえようか。

「漢字が俗に『表意文字』だといわれているのに幻惑されて、ひたすら字の形ばかりを問題にして、その漢字の代表する語音と意味とにさして注意を払わなかったのは、今までの大きな欠点であつた。日本における漢語や漢字の研究は長い歴史をもっているにもかかわらず、このような根本の問題からして認識を誤っているようでは、まことに心もとない。」

もとより筆者は、奈良平安朝からこのかた、私たちの祖先がいちいちの漢語に対して施してきた日本語訳——「訓」を全面否定する立場には立っていない。訓はたしかに便利なもので一方に利用する価値をもつが、ただそのみでは万全ではないことを再確認し、漢語やひいてはもろも

ろの漢籍(中国文化)に対する安易な姿勢を戒めたいと思うのである。

「夜宴左氏莊」と題する杜甫の五言律詩がある。この詩を岩波中国詩人選集本は次のように通釈している。いまその第四句に着目しつつ考察をすすめてみたい。(念のため書き下し文を附す。)

風林織月落	風林	織月落ち
衣露淨琴張	衣露	淨琴張らる
暗水流花徑	暗水	は花徑に流れ
春星帶草堂	春星	は草堂を帯ぶ
檢書燒燭短	書を檢して	燭を焼くこと短かく
看劍引盃長	劍を看て	杯を引くこと長し
詩罷聞吳詠	詩罷んで	吳詠を聞く
扁舟意不忘	扁舟	意に忘れず

風ばんだ林にか細い月が落ち、衣の露もしとどに淨らかな琴は糸を張られた。

暗がりをゆく水は花の咲くこみちのほとりを流れ、春の星空は草堂

を、そつと、い、だ、い、て、い、る。

書物をしらべては蠟燭の短くなるまでもやしつくし、剣を鑑賞しながらのどやかに盃を口にはこぶ。

詩を作るのが終るとだれかが呉の歌を歌いだしたのを耳にした。それを聞いていると、小舟に乗ってその地にさすらった若い日のことが思い出として忘れられぬのだ。(傍点筆者 以下同じ)

割注の中で四句目の「帯」については、

○帯 それを一部分に、軽く伴なう、という意という語釈がみえる。「それを」の「それ」とはここでは草堂をさしていると考えられる。

そうすると、いま読者がこの句の訓読(書き下し文)と注および注釈の三者を勘案するならば、「春星帯草堂」は——満天に星をいただいた春の宵、作者からかなり離れた場所にポツンと草堂が建っており、その上空に星が草堂を包み込むように輝いている——という情景を目に浮かべるにちがいない。しかし考えてみると、この詩は作者が草堂の中もしくはせいぜい中庭あたりに位置していてもした作品であるから、四句目で急に作者の視点(位置・場所)を遠方に移動してしまうのはいかにも不自然である。

平凡社本ではこの訳を「春の星は茅ぶきの家をつつみ込む」としてゐる。この訳は必ずしも作者の視点をずらしたとはいえないが、視点ははっきりしなくなっている点は同じである。また『杜甫私記』はこの句を「春星は草堂を帯う」と訓んだ上で次のように言う。「帯」の字はいまの邦語で、附帯、というときの「帯」である。ふりおうげば、大空にはくりひろげられた星の天蓋、その下部にあたたかく抱擁されて、草堂はある。」と。すなわち、作者は草堂(ののきば)からふり仰いでその屋根にかかる満天の春星をみているのであり、はるかに離れた地点から春星と草堂を眺めているという構図にはならないのである。

このことは、恰も次の詩(杜甫「江村」)において、第四句目を解釈をする際に、作者の視点を考慮しなかったために前後矛盾した状況をもたらしたのと同じ程度に不自然な解釈だといえよう。

清江一曲抱村流

長夏江村事事幽

自来自来梁上燕

相親相近水中鷗

老妻畫紙為棊局

稚子敲針作釣鉤

多病所須唯藥物

微軀此外更何求

澄んだ川水が、一まがりして村をだきかかえるように流れている、日ながの夏の川ぞいの村ではなにごともしずかなことばかりだ。

梁の上に巢をかけた燕は、きままに往ったり来たりしておるし、水中にあそぶ鷗は、私に親しみかけ近づいてくる。

老妻は紙に線をかいてごばんをこしらえ、こどもは針をたたいて釣り針を作っている。

この病気がちの身に必要なものはただ藥物ばかりだ。このいやしいからだには此のほか何がいろいろぞ。

領連二句を平凡社本訳(二七六ページ)でみるとこうである。

「家の梁のあたりを燕が行ったり来たり、水の上にかんで鷗は親しく近づいて来る。」

また集英社本では「梁の上の燕は自由に往ったり来たりしているし、水中の鷗は人に親しみ近づいてくる」と訳し、脚注に「列子に、人に害意がなければ、鷗は親しみ近づいてくるが、いったんこれを捕えようという害意が生ずると、鷗は近よらぬという話がある。」と注釈を加えている。

さて筆者は「相親相近水中鷗」において、相親相近するのは鷗同士だ

と思うのだが、各本では鷗が私（人）即ち杜甫に親しみ近づくという理解になっている。三句目で作者は自分の家の梁上に巣くった燕が自在に出入りする様子を家の中で眺めている。頸連でも作者の位置（視点）は（従って老妻も稚子も同じ）家の中である。それを四句目に限って作者は川べりにまで足を運び、しかも鷗（アヒルや鶏でさえない）が作者に親しみ近づいてくるという。これはいかにも不自然な解釈ではないだろうか。推察するところ、多分このミスは、集註本などの先の列子注に引き摺られた結果もたらされたものではないだろうか。割注に短絡しすぎるとつまらぬ誤訳を惹き起す見本である。

右の例で判る通り、ある一つの詩の中で、作者の視点があちこちに移動して定まらないということはありえないことである。勿論、作者が視点の移動を意識して作った詩は論外である。視点の定まらぬ解釈はまず誤訳ではないかを疑ってかかる必要があるだろう。

ではそのような誤訳は何故生じるのだろうか。「春星帯草堂」についてみてみると、その原因は、初めに「帯」義の解釈のずれがあり、そのずれを助長し確定的にした訓読の影響を見逃すわけにいかないだろう。すなわちこの句を解釈する際に「それを一部分に軽く伴なう」という「帯」義の一つにすぎない訳語を性急に於てはめてずれを惹起した。（先の「邦語で附帯」の注釈も同罪である。）そのずれが「春星 草堂を帯ぶ」という訓みで確定的となったと考えられる。

いまここに「帯、戴ともに音 dai」、「帯冠式||戴冠式（『大漢和辞典』）」、「帯眼鏡||戴眼鏡（めがねをかける『中日大辞典』）」というシェーマがある。また「戴月披星」「戴星而出、戴星而入（朝早くから夕方晩くまで野良仕事に励む）」（いずれも『中日大辞典』）という成語に対して、同じことながらを表現した「帯月荷鋤歸（陶潜「帰園田居其三」）」という句がある。これらは、冠をかぶったり、眼鏡をかけたたり、

月を頭上にいただきながら帰るといふ同一現象を述べているわけだから、この用例の範囲内でみる限り、「帯」と「戴」はひとまず等号で結んでよい。つまり語義上「帯」と「戴」はかなりの部分でダブルと考えてよいようだ。

しかしここで「帯」の意味を明確にするためには、「帯」と「戴」の共通部分を求めるより、むしろ両語を対比してその違いを追求する方がより成算的である。

維嶽降二臣 戴天臨萬姓（王維「奉和聖製登降聖觀、與宰臣等同望、應制」）

帶天澄廻碧 映日動浮光（陰鏗「渡青草湖」）

右詩の「戴天」はかなり抽象化したいいい方で「天をいたたく」という觀念をいっている。「帯天」は水（地）平線から天までつづいている、という現象を言っているようだ。「戴」が固定的に「（頭）上」にのせる」という概念を示すのに対して、「帯」は動的な連続の概念が強いようである。次の例がこの見解を支持するであろう。

秋風嚴瀨清 春雨戴溪綠（陸游「初秋夢故山、覺而有作」）

戴花紅石竹 帔暈紫檀榔（白樂天「江南喜逢爾九徹、因話長安旧遊、贈五十韻」）

婦人乘野艇 帶月過江邨（劉長卿「送張十八歸桐廬」）

帶日浮寒影 乘風進晚威（蘇味道「詠霜」）

「春雨が溪に緑をかぶせた」「石竹が紅い花をつけた」に対し、「月を背にしつゝ江村を過った」「日のさす中に寒影が浮かぶ」という風に訳してみると、「戴」と「帯」がかなり異質の語であることが判る。

「帶日下雨（日がさしているのに雨が降る、狐の嫁入り）」という成語が端的に語るように、「帶日」は「日光を伴いつつ……（する）」というニュアンスが強い⁽¹⁰⁾。従って「帶月」も「月を帯びる・月光をあびる（『大漢和』）」というよりも、「月（光）を伴い（あび）ながら（つつ）」

という連続感を含ませた解釈の方がよりびつたりしよう。⁽¹¹⁾ いうまでもなく、現代漢語の「帯」は「連着一起做(ひきつづいて一緒にやる)」という意味を持っているし、「連く帯く」は同時並行的に二つの動作が連続して行われることを言うときの構文である。「連説帯笑(しゃべったり笑ったり)」。

してみると、「春星帯草堂」は、まずそれを「春星(冠)戴草堂」にいかえてよいであろう。そして「帯」が時空にわたる連続感を伴う語であるという右の推定を是とするならば、この一句は「みあげると満天の春星が遙か上空から草堂の屋根にまでふりそそぎきらめいている」という意味で理解する必要があるだろう。強いて訓読を考慮に入れるならば、それも「春星草堂二帯ス」とでも読んでおこうか。

二 「帯雨傍林微」考

ホテルを詠んだ杜甫の五律詩「螢火」を岩波中国詩人選集本(八二ページ)は次のように解説する。六句目の「帯雨」に着目しつつ見ていこう。

幸因腐草出 幸いに腐草に因りて出づ
敢近太陽飛 敢て太陽に近づいて飛ばんや
未足臨書卷 未だ書卷に臨むに足らず
時能點客衣 時に能く客衣に点ず
隨風隔幔小 風に随いては幔を隔てて小さく
帶雨傍林微 雨を帯びては林に傍いて微かなり
十月清霜重 十月 清霜重ければ
飄零何處歸 飄零して何れの処にか帰る

ほたるは幸いにもくさった草をたよりとして生れ出たものゆえ、太

陽に近づいて飛ぶことなどどうしてできよう。

書物を照らすことなどはできるべくもないが、ときには旅人の衣の上にとまって光をとますのだ。

また風のまにまに流されてはまくのそとで小さく光り、雨にぬれては、林によりそいつつかほそく照らす。

十月ともなつて清らかな霜が重たくおくこととなれば、お前はおちぶれさすらつてどこに身を寄せるといふのだ。

○帯雨 かるく雨にぬれる。

平凡社本(二五〇ページ)もここを「雨にぬれると林のあたりにかすかに光る」と訳している。杓子定規なものの言い方をすれば、「帯雨」は「雨にぬれる」とは、このときだけ「帯」は「ぬれる」意味を持つのであろうか。それとも「帯雨」が熟語として「雨にぬれる」意味であれば、他のすべての詩文に表現されたそれを「雨にぬれる」と解していいのだろうか。はたまた螢が夜目にも白く雨に濡れているさまが見えるようになっていいのだろうか。

なるほど人口に膾炙した白楽天「長恨歌」にある「帯雨」はそのままだ「雨に濡れる」と訳して梨花の可憐なさまをいささかも減殺しない。

玉容寂寞淚闌干 梨花一枝春帶雨

しかし作品が有名だからといって他のすべての作品にわたってこれが適訳だとは言いきれまい。確かに右の句などは現実に雨が降っている状態を描写しているのだから「雨に濡れる」のはいわばごく当り前のことである。ただそれを一般化した場合、果して「雨に濡れる」で通用するだろうか、そのように直言してしまうのはいささか情緒に欠けはしまいかという疑問が頭を抬げる。「帯雨」はその前の句に「隨風(風に吹かれるままに)」という用語があるのと対比して、「小雨の中を」とか「雨に降られながら」とか「雨を伴いながら」といふほどの、やや間接的な

いい方なのではあるまいか。

「随風……、帯雨……」という用法は杜甫の五律詩「對雪」にも現れる。

随風、且間葉 帯雨、不成花

「雪が風に乗って枯葉と雜り合いながら舞い落ち、雨を伴っている（みぞれまじりの）ため雪が花びらにならない。」という内容である。⁽¹²⁾ 同様の表現が陸游の七律詩「雨中泊舟蕭山縣驛」にもみえる。

晚笛随風、來倦枕 春潮帶雨、送孤舟

「晚笛の音は風に乗って旅疲れの枕元まで聞えてくる。春潮は雨を伴いながら孤舟を送る。」対照的に用いられているからには、両者には何か共通したイメージがあるに相違ない。そこで「随風」のイメージにひきつけて言えば、「帯雨」はある物体が静止的に雨に濡れている状態にポイントを置いて述べたというより、その物体が雨を伴いながら（雨にうたれながら）別の現象を起していることにポイントを置いて述べたものという感が強い。つまり「帯雨」は動賓構造として単独で使われる場合（次例）より、

瀑布杉松常帶雨、夕陽蒼翠忽成嵐（王維「送方尊師歸嵩山」）

修飾語的に使われる方が多いようである。そしてその方がより「帯」の原意に適わしい使われ方であると考えられる。

曙角凌雲乱 春城帶雨、長（杜甫「乘雨入行軍六弟宅」）

春潮帶雨、晚來急 野渡無人舟自橫（韋應物「滁州西澗」）

古柳依沙發 春苗帶雨、鉏（劉長卿「過鸚鵡州王處士別業」）

帶雨、經蘭沼 盤煙下竹邨（杜牧「憶遊朱坡」）

右の各句において、「帯雨」はそれぞれ「長」や「急」「鉏」「經」という形容詞や動詞を修飾しているとみてよい。

一方、「雨」が「雪」や「露」になると、同じような自然現象ではあるが目に見えるものであるだけに感覚的表現と写実的表現が相半ばす

る。すなわち「雪を伴いながら・雪の中を」と「雪をかぶって（前節の「戴」に近似）」の二様である。ただし原意はやはり前者に傾くとみている。

乘潮發溢口 帶雪、別廬山（白樂天「潯陽宴別」）

帶雪、梅初煖 含烟柳尚青（孟浩然「題惠上人房」）

虎溪間月引相遇 帶雪、松枝掛薜蘿（積靈一「僧院」）

帶雪、松枝翹膝脛 放花菱片綴毛衣（白樂天「池鶴」）

犬吠水声中 桃花帶露濃（李白「訪戴天山道士不遇」）

さて以上のようにみえてくると、「随風隔幔小 帶雨傍林微」は、「帯雨」を殊更に「雨にぬれる」と密着して捉えるのではなく、「風のまにまに流されて螢は幔の外で小さく光り、小雨の降る中を林に傍って微かに光る」という程度に、やや客観視した間接表現の句として解釈する方がより本意に沿っていると思われる。

三 「風壞帶三苗」考

「野望」と題する次の詩を素材にして「帯」字の究明を続けよう。杜甫五十八才、春、長沙より衡州に南航したときの作とされる。

納納乾坤大 納納として乾坤は大に

行行郡国遙 行きて郡国は遙かなり

雲山兼五嶺 雲山は五嶺に兼らなり

風壞帶三苗 風壞は三苗を帯ぶ

野樹侵江闊 野樹は江の闊きを侵し

春蒲長雪消 春蒲 雪の消ゆるに長ぜり

扁舟空老去 扁舟 空しく老い去り

無補聖明朝 聖明の朝を補う無し

天地はなかに多くのものを容れてまことに広大であり、私の旅のゆくさきさまの郡や国ははるかにいくらでもある。

雲のおく山々は蛮地にある五嶺の山々とつらなり、風土はといえ、三苗の蕃族のようすを帯びている。

野の樹はひろびろとした大川の水面を侵さんばかりに茂っており、春の蒲は雪の消えかかったところを伸ばしている。

私は小舟の中においていたずらに年老いてしまった。聖明の天子の朝廷に何ら貢献することもなしに。

○帯 ふんい気として持つ。⁽¹³⁾

「ふんい気として持つ」という語注と「風壤は三苗を帯ぶ」という訓読を手がかりにして、通釈部分をさらにわかり易くいかえると次のようになろうか。

風土つまり風俗はといえ、三苗の蕃族のそれ（住居のたたずまいや衣裳など）のようすに似かよっている。

ここで「ふんい気」というからには「風壤＝風土」は文字通りの風や土くれ即ち自然の風土ではなく、どちらかと言えば人間風土すなわち風俗習慣の意味に解しているようだ。ゆえに周囲の状況がそういう「ようすを帯びている」ことになるのである。だが注意してみると、ここでも訳注者は「帯」の字義を矮小化してとらえ、訓読に拍車をかけられて、原意からかなり離れた解釈をしているのではないだろうか。

筆者の直観によれば、この句は前の句にひきつづき、

雲のかかった山々は（南方の）五嶺山脈へとつらなっており、あたりの風土つまり野原や林は（北方の）三苗の地へとつづいてい

と起連二句を受けて周囲の風土・大地が遙か三苗の地まで連なっている景観を述べているとりたい。「風土」は家のたたずまいや人間の姿形、ことば遣いなどいわゆる「風俗」の意味も含まれるであろうが、より正確には自然風土のそれとして使われているのではなからうか。

『大漢和辞典』は「風壤」に「土地の風俗」とい訳語を与えており、杜甫の右の一句と次の二例を参考に掲げている。

風壤一殊 山河萬里（駱賓王「與親情書」）

風壤瞻唐本 山祠闕晉餘（李益「晉祠詩」）

なるほどこの二例でみる限りでは、「風壤」を「土地の風俗」ととつても（ことに後者の場合）間違いとは言いきれない。しかし同じ駱賓王の次の詩中のそれは、人間界主体の「風俗」の意味よりも、明らかに自然界の「風土」の色合いが濃いといわねばならない。

山川殊物候 風壤異涼暄（早秋出塞）

『中日大辞典』では「風壤」を古語としながら「風土、土地がら」と解説し、その「風土」には「氣候と土地のありさま」という説明を施している。

『辞海』や『辞源』には出ていないので、次に『大唐西域記』に現れる「風壤」を一瞥してみよう。

……印度之境疆界具舉、風壤之差大略斯在、同條共貫粗陳梗概、異政殊俗據國而叙。（卷二・一の一五）

印度各地の地勢・物産・風俗・風土を詳説するなかの一文である。平凡社本ではここを、「印度の土地の境界は大体示し、風土の差異はおおむねこんなことである。その共通点をほぼ述べわけであり、政治を異にし風俗を殊にする点はその国ごとに説明しよう」と訳している。⁽¹⁵⁾

「風壤」に（人間）風俗と（自然）風土の双方の意味が含まれていることを証明しようと意図したのだが、調べるほどに却って『大漢和』説

を否定する資料の方が多くなった。つまり「風壤」はほぼ「風土」に置き替えてよく、風俗習慣の意味は極めて薄いとみなされねばならない。そうなると次に説明すべき問題は、「帯」の字義をいわば抽象的に「そういう様子をおびている」とするの、それとも「(地勢的に)連なりのおびている」という方向で把えるのがという点に移ってくる。まず『大漢和』より「帯□」(□は自然界の名詞)の簡条を抜き出してみよう。

帯河||河を帯びる、河をめぐらす。

帯江||江を帯びる、水流をめぐらす。

帯海||海を帯びる、海をひかえる。

帯湖||湖を帯びる、湖をめぐらす。

帯地||地を帯びる、地をめぐらす。

「□を帯びる」とか「□をめぐらす」という説明では一向にその実状がイメージ化できない。さすがに「帯海」だけは「海をめぐらす」といえずに「海をひかえる」といいかえている。「帯びる」「めぐらす」とは一体どういふことなのだろうか。まさか「湖や河を一部分に軽く伴う」わけではあるまいが。

さて我々は「負山帯海¹⁶⁾」とか「依山帯海¹⁷⁾」という語句をみると、容易に、後方は山を背にし、前方は海を控えた自然の情景(場合によっては要害の地など)を想像することができる。同様に「前帯河而後被山¹⁸⁾」とか「負山帯河¹⁹⁾」という語句をみても、前後に山と河を控えた土地の情況を目に浮かべるに違いない。このイメージが妥当性をもつことは、次の李白の詩が裏づけてくれる。

涼水帶吳京 金陵控海浦 (鼓吹入朝曲)

宗英佐雄郡 水陸相控帶 (贈從弟宣州長史昭)

江帶峨眉雪 橫穿三峽流 (經亂離後天恩流夜郎憶舊遊書懷贈江夏韋太守良宰)

「帯」が「控(ひかえる)」と対比して用いてあるところから、両者の語義は互いに補い合う関係にあることがわかる。また「帯江」が「江帯□□」という語順にもなること、さらにそれらは海陸など自然の景觀を述べる際に使われていることもはっきりする。海や川や陸地や山が互いに控え合い、互いにつながり合っている状態を言っているのだ。そのことを『大唐西域記』の用例で更に明確にしておきたい。その巻一に次の文がみえる。

四面負山、衆流交湊……

鉄門者左右、帶山、山極峭峻……

平凡社本では「四面負山」を「四面は山に囲まれ」と訳し、「左右帶山」を「左右に山を帯びていて」と訳している。後者は、險阻な谷あいの隘路に鉄門と呼ばれる門があり、その左右は山に連なっている峡谷の様子である。

……南帶長流(卷七)

……臨帶兩河(卷十二)

右の箇所は平凡社本では「南に河の長流を帯びている」、「二つの河に臨みとり巻かれ」となっていていづれも判然としない。意訳ではあるがむしろ「水流其南に走る」、「二流の河水ありて²⁰⁾」の方が実状を想像しやすい感じである。「臨帶兩河」とは、ある土地の両側に河が同方向に流れている、その中間地帯を説明した文である。

「風壤帶三苗」は、作者が小舟の中から周囲の状況に目をとめて「ああ、ふんい気がごとくなく三苗の蕃族のようすに似ているな」と感想を述べているのではなく、遙か来し方を眺めやりながら「このあたりの風土はかの三苗の地までつづいているのだなあ」と広大な自然を描写するとともに、秘かに憂愁をかみしめている、そんな句ととりたいたい。

四 「帯」字考

『辞源』の「帯」項は次の通りである。

帯〔朶艾切。音戴。泰韻〕

一、衣帶也〔論語〕束帶立於朝。

二、佩也。〔礼〕帶以弓鞞。

三、隨行曰帶。如隨帶、帶領。

四、概指其地、俗曰一帶。

五、婦人病名。詳白帶條。

一の衣帶也とは「束帶」即ち「おび」のことで、「皮帶（ベルト）」「包帯」「玉帯」「冠帯」「角帯」「帶金」「解帶」「帶笏」など名詞としての「帯」である。

四の概指其地とは「一帶」などと概括して称するときの名詞「帯」である。おび状の土地、「地帯」「寒帯」「熱帯」等もこの部類に入れて考えても差支えないだろう。

さて問題は、二の佩也および三の隨行也という、動詞として使われるときの「帯」が、それぞれどういふ場合にその訳語に置き換え可能であり、しかも必要かつ十分かというところにある。

『大漢和』をはじめとする各種の漢和辞典は、この動詞としての「帯」におよそ次のような訳語を付し分類している。

一、おびる（ひもで身につける形で）。二、おびる（そばにとりあう形で）。三、めぐる。四、まつはる、からむ。五、かざる。

「帯刀」「帯剣」「帯袂」「帯甲」「帯経」などの「帯」が本来の「佩帯（ひもで身につける）」の意味で、一の部類に入る。そのうち「帯甲」などは、「よろいを身につける」から「兵士」という名詞に転化している。

帯甲滿天地 胡為君遠行（杜甫「送遠」）

「隨帶」「帶領」をはじめ「帶同」「携帶」「妻帶」などが文字通りそばに伴うかたちでおびる二の「帯」である。ときに、前節でとりあげた「帶月」や「帶雨」を、「月がそばにくっついている」「雨をおびる（そばにとりあう）」という訳でこの範疇に入れることは果して適切なのであろうか。

『辞海』における「帯」の説明も引用例の異同がある程度で『辞源』とほぼ同じである。ただ動詞としての「帯」義に次の一條が加えてある。

○ 夾雜也。杜甫詩「頗帶憔悴色」

この一條を親切につけ加えることが、古典読解の上でいかに重要なはたらきをもたらすか次にみる通りである。

「頗帶憔悴色」（「別賢上人」とは、「いささか憔悴の風がみえる」意であるが、このように、「帯」が時に「夾雜（まじる、含みもつ）」に移し替え可能であることを示しておけば、次の各詩の訳出の場合、理解がはやいと思われる。

名花傾國兩相歡 長得君王帶笑看（李白「清平調詞」）

數人不知幾甲子 昨來猶帶冰霜寒（李白「下途歸石門旧居」）

天地再新法令寬 夜郎遷客帶霜寒（李白「江夏贈韋南陵冰」）

石影銜珠閣 泉聲帶玉琴（杜甫「憶鄭南」）

翠色落波深 虛聲帶寒早（李白「茲姥竹如熟十詠」）

松溪石磴帶秋色 愁客思歸生曉寒（李白「觀博平王志安少府山水粉

圖」）

帶病稀相見 西城早晚來（周賀「逢驢公」）

これらは、音声の中に寒さや他の音など目に見えない概念を含ませて「帯」で表現したもの、憔悴色とか秋色、冰霜など本来感覚的觀念を外見のものとして表現したもの、笑い、羞らい、愁いなどの心理を顔面に

表出させて「帯」で描写したものである。従って「帯羞」「帯愁」の「帯」もこの部類に入れて考えてよいであろう。

「帯」義についての叙上の解釈は、しかしむしろその派生義としての謂いであって、「帯」にはもつと本質的な概念(本義)が備わっている。それは実は辞書の中で「解字」という形で説明がなされているのである。

〔解字〕ひもで物を通した姿十巾(たれ布)。長い布のおびでもっていろいろな物を腰につけることをあらわす。

更に藤堂明保氏の『漢字語源辞典』(五三二ページ)で補足しておく。

〔帯〕は「ウネウネと伸びる、伸ばす」という基本義をもった「移」「蛇」「挖」などと同系のことばで、「横に長く伸ばすオビの形」に着目した命名(たど→たじ)である。

「帯」には本来「横に伸びる・伸ばす」という概念があり、その意味で「連続」とか「連延」という訳語が適切な場合が少なくないと考えられる。「□□帯□□」という構文でいえば、この「帯」は「□□↓□□」
「□□↓□□」という形の記号「↓」「↑」の意味に等しい場合がある。そしてこの「ある地点からある地点まで連続する。横につながりつく」⁽²²⁾解釈を与えない限り、先に述べた「帯海」をはじめ、次のような使われ方の「帯」を十分に説明することはできないであろう。

- 野店帰山路 危橋帯郭村(許渾詩)
- 帯郭園林仙苑近 送春船舫繡簾遮(杜範詩)
- 枇杷林檎帶谷映渚(謝靈雲「山居」)
- 逆湍流棹唱 帶谷聚笳声(庾肩吾「山池応令」)
- 南城周七里襟澗帶谷絶壁百尋(「水經注」)
- 遙看宮佛圖 帶壁復垂珠(梁簡文帝「望同泰寺浮圖」)

「横にのびつながる」という基本概念が下地にあつてこそ、「帯びる」とか「伴なう」という積義も生かされる。願わくは「帯」字の項には頭初に「つづく、横にのびる」「連続、連帯」の訳語を掲げるべきであろう。それらの用法の場合は訓読も「……ヲ帯ブ」よりも「……ニ帯ス」と読み下した方がより原意に適っていると考えられる。

(注)

- 1 河野六郎「文字の本質」岩波講座「日本語」8「文字」一一ページ
- 2 藤堂明保「漢字概説」同右八五ページ
- 3 岩波中国詩人選集「杜甫」上黒川洋一注 二五ページ
- 4 小野忍・小山正孝編訳「唐代詩集(上)」一七九ページ
- 5 吉川幸次郎「杜甫私記」二二四ページ
- 6 岩波中国詩人選集「杜甫」上 九二ページ
- 7 目加田誠「杜甫」漢詩大系 二四二ページ
- 8 「列子・黄帝第二」海上之人有好鷗鳥者、每旦之海上、從鷗鳥遊。鷗鳥之至者、百數而不至。其父曰、吾聞、鷗鳥皆從汝遊。汝取來、吾玩之。明日之海上、鷗鳥舞而不下也。
- 9 杜甫「客至」詩 舍南舍北皆春水 但見群鷗日日来 にも同じ右の「列子」の注がついているのである。
- 10 帶日交簾影 因吹掃席塵(元帝「詠陽雲樓簾柳」)
依帷濛重翠 帶日聚輕紅(皇太子「梁塵」)
- 11 帶日芙蓉照(陳后主「七夕宴猷堂」)
沙帶秋月明 水搖寒山碧(李白「涇溪南藍庭下有落星潭、可以卜築、余泊舟石上、寄何判官昌浩」)
- 12 仇兆鰲「杜少陵集詳註」雪飛葉落、隨風雜舞、故曰閒。雪有六花、帶雨而濕、故不成。
- 13 岩波中国詩人選集「杜甫」上 二〇一ページ
- 14 三四遠望、承上乾坤郡國、……五嶺在南、三苗在北。同注12仇註。

- 15 平凡社「大唐西域記」水谷真成訳 七三ページ
- 16 「遼史地理志」并州北有代朔營州東暨遼海、其地負山帶海、其民風氣剛勁自古為用武之地。
- 17 「晋書」張華伝 華為安北將軍、馬韓新彌諸国依山帶海、歷世未附者二十余国並遣使朝獻。
- 18 「戦国策」殷紂之國左孟門而右漳滏、前帶河而後被山。
- 19 「遼史地理志」灤州負山帶河為朔漠形勝之地。
- 20 堀謙徳「解説西域記」国書刊行会
- 21 学研「漢和大事典」四〇七ページ
- 22 紫廻、紫統、紫帶、紫旋、紫縹（博友社「漢和大辞典」）